

介護福祉士養成課程で学ぶ学生の死生観：死生観に影響を与える要因分析

著者	久山 かおる，井手添 陽子，米原 あき
雑誌名	鳥取短期大学研究紀要
号	60
ページ	1-8
発行年	2009-12-01
出版者	鳥取短期大学
ISSN	1346-3365
URL	http://doi.org/10.24793/00000109



介護福祉士養成課程で学ぶ学生の死生観 －死生観に影響を与える要因分析－

久 山 かおる・井手添 陽 子・米 原 あ き

Kaoru KUYAMA, Yoko IDESOE, Aki YONEHARA : The Life and Death View of Students on the Care Course
－Analysis of the Factors Influencing their Views－

介護福祉学生の死生観を明らかにするために、教育課程の異なる2校の介護福祉養成校で学ぶ学生の死生観を調査した。

両校とも「死後の世界観」「死への恐怖・不安」の得点が高く、死生観合計得点に教育課程の違いによる有意差は認められなかった。死別体験のない学生はある学生に比して、死を否定的にとらえ回避する傾向がみられた。死生観は個人の体験により異なる。教授するに際し、基本的知識習得だけでなく、学生への個別対応の重要性の示唆を得た。

キーワード：死生観 看取り 介護福祉士教育 個別体験

はじめに

団塊の世代といわれる第一次ベビーブームの人が定年を迎え、2015年には高齢者人口が急激に増加することが見込まれている。これに伴って、今後の日本は、高齢化率の伸長と75歳以上の後期高齢者人口が著しく増加することによる、死亡者数の急増が予測されている。こうした状況の中で介護現場での看取りの問題、養成教育の見直し等については鳥取短期大学研究紀要第59号「介護福祉学生（1年制課程）の死生観調査分析」^{注1)}の中で久山が述べている。

在宅で亡くなる人と病院で亡くなる人の割合が逆転し、死亡者の8割以上が医療機関や施設等で亡くなるようになった背景^{注2)}には、医療技術の進歩や医療機関・高齢者施設の増加がある。病院で死を迎える人は、最後の最後まで医療技術の提供を受けることができる一方で、多くの医療機器に囲まれ、家族が立ち入りにくい状況を生み出している。また家族形

態の変化により核家族が増え、成長過程で高齢者と日常的に関わる機会が減ってきている状況もある。こうしたことから、「死」を身近に感じないまま成長する子どもが多くなっていると考えられる。一方で、医療においても「尊厳死」や「安楽死」などの問題^{注3)}が取り上げられてきたように、避けられない死を如何に迎えるかが議論されてきている。長寿国である日本において、「安らかな死」を迎えることができる終末期のケアは、医療や高齢者介護において重要な課題であると言える。

介護福祉士を目指す学生が死について考え、安らかな死を迎えるケアの一翼を担うことができるよう、新カリキュラムで導入された教育内容^{注4)}の「終末期の介護」を充実させていくことが養成教育に求められる。そのためには介護福祉士養成校で学ぶ学生（以下、介護福祉学生）の「死」に対する考え方を把握しておく必要があると考える。

ターミナルケア教育の基礎資料を得るため、2009年1月に鳥取短期大学専攻科福祉専攻（以下、本学

とする)の22名を対象にアンケート調査を実施し、その結果を紀要59号で報告しているが、介護福祉士の養成課程で何らかの差異があるかどうかを明らかにするため調査対象を拡大して調査を行った。

1. 研究目的

新カリキュラムの中で新しく含まれた「終末期の介護」の教育内容・方法を充実させる資料を得るため、介護福祉学生の死生観を明らかにすることを目的に研究を行う。

2. 研究方法

(1) 調査対象

本学専攻科福祉専攻の学生17名と、教育課程による比較をするため、県内介護福祉士養成校の2年課程のT養成校(以下、T校とする)の1年生47名と2年生38名、全員の同意を得、調査対象とした。

本学の養成課程は1年課程であるが、保育士の資格を有していることを入学要件としているため、社会人入学生が含まれてはいるが、多くは高校卒業後入学している2年課程のT校学生とは基礎としての習得内容に相違があることから、本学専攻科とT校を調査対象として調査を行った。

(2) 調査方法

本学学生とT校1年生は介護実習、2年生は「終末期の介護」を履修していない6月に集合法によるアンケート調査を実施した。

(3) 調査内容

質問表の主な内容は、学生の属性(学年、年齢、性別)と死生観に関する質問(死別体験、臨終に立ち会った経験、自己の死を意識するような病気や事故の体験、実習中の看取りの経験、子ども時代における家庭での死の話題、死生観に対する宗教の役割、死生観に影響を与えた因子、死を考える機会となっ

た体験、死生観尺度を調査した。死生観については平井らの開発した死生観尺度を用いた^{注5)}。

(4) 死生観尺度

平井らの開発した死生観尺度は、日本人の死生観を測定するための簡便な尺度として作成された。①死後の世界観、②死への恐怖・不安、③解放としての死、④死からの回避、⑤人生における目的意識、⑥死への関心、⑦寿命感、という7因子27項目で構成されている。

回答は、7件法(1.当てはまらない、2.ほとんど当てはまらない、3.やや当てはまらない、4.どちらともいえない、5.やや当てはまる、6.かなり当てはまる、7.当てはまる)により回答を求め、各因子とも得点が高いほど態度が強く表れていることを示している。

3. 分析方法

統計ソフトはSPSS 13.0 Jを用い、調査対象者の属性は、単純集計およびクロス集計を行った。2群間の比較はt検定、学校ごとの学生の基本属性と死生観尺度との比較を行うために一元配置分散分析を用いた。

4. 倫理的配慮

T校には学校長に調査の依頼を行い、文書により調査の同意を得た。対象者には、研究目的、具体的内容を説明し、調査は無記名であること、データーは全体集計を行い個人が特定されないこと、調査を拒否することにより不利益を受けないこと、調査への参加は自由意思であることを説明し、同意を得た。

5. 結 果

調査対象者のうち、有効回答が得られた本学17名、T校84名(1年生47名・2年生37名)の調査結果の

集計を行った。

アンケートデータの信頼性分析を実施した結果、クロンバックの α 係数は0.701を示し、信頼性は認められた。

(1) 調査対象者の属性

調査対象者の年齢は、本学20～21歳（平均年齢20.2歳）、T校1年生18～43歳（平均年齢23.3歳）、2年生19～38歳（平均年齢21.3歳）であった。

男女の内訳は、本学男子7名・女子10名、T校1年生男子18名・女子29名、2年生男子16名・女子21名であった。

(2) 家族の死の体験の有無

家族の死の体験があると回答した人は、本学16名（94.1%）、T校1年生40名（85.1%）・2年生26名（70.3%）であり、全体では82名（81.2%）の学生が家族等身近な人の死の体験があった。両校の比較では家族の死の体験の有無に有意差はなかった（ $p=0.07$ ）。

学生との関係性については、両校とも祖父母が最も多く、中には父母の死を体験している学生があった（表1）。

(3) 友人の死の体験の有無

友人の死の体験があると回答した人は、本学7名（41.2%）、T校1年生13名（27.7%）・2年生6名（16.2%）であり、全体では26名（25.7%）の学生が友人の死の体験があった。両校の比較では友人の死の体験の有無に本学とT校に有意差はなかった（ $p=0.179$ ）。

表1 家族の死の体験と関係 人(%)

	本学	1年生	2年生
祖父母	8(50.0)	26(65.0)	19(70.4)
父母	3(18.8)	5(12.5)	2(7.4)
兄弟姉妹	0	0	0
曾祖父母	8(50.0)	9(22.5)	5(22.2)
親戚	3(18.8)	11(27.5)	11(40.7)

(4) 臨終に立ち会った経験

臨終に立ち会った経験があると回答した人は、本学4名（23.5%）、T校1年生15名（31.9%）・2年生14名（37.8%）であり、全体では33名（32.7%）であった。両校の比較では、本学とT校に有意差はなかった（ $p=0.328$ ）。家族や友人の死の体験をしている人であっても臨終に立ち会った経験は少なかった。

(5) 自己の死を意識するような病気や事故の体験

自己の死を意識するような病気や事故の体験があると回答した人は、本学4名（23.5%）、T校1年生6名（12.8%）・2年生7名（18.9%）であり、全体では17名（16.8%）であった。両校の比較では、本学とT校に有意差はなかった（ $p=0.495$ ）。

(6) 子ども時代における家庭での死の話題

本学とT校との子ども時代の家庭での死の話題は表2に示したとおり、それぞれ最も多かったのは「語り合った記憶がない」であり、本学の学生は、T校の学生と比較して「語り合った記憶がないが」の割合が低く、「大っぴらに語られた」の割合が35.3%と高くなっている（表2）。しかし、全体としては、70%以上の学生が死について語り合っていなかったことがわかった。

(7) 死生観に対する宗教の役割

死生観に対する宗教の役割について、「非常に重要」「やや重要」と回答した人が、本学12名（70.6%）、T校1年生34名（72.4%）・2年生24名（64.8%）であり、全体では70名（69.3%）の学生が重要と考えている（表3）。

表2 子ども時代の話題 人(%)

	本学	1年生	2年生
おおっぴらに語られた	6(35.3)	6(12.8)	8(21.5)
不快感があった	1(5.9)	5(10.5)	2(5.4)
タブーであった	1(5.9)	3(6.4)	2(5.4)
語り合った記憶がない	9(52.9)	33(70.2)	24(64.8)
NA	0	0	1(2.7)

表3 死生観に対する宗教の役割

人(%)

	本学	1年生	2年生
非常に重要	4(23.5)	10(21.3)	10(27.0)
やや重要	8(47.1)	24(51.1)	14(37.8)
さほど重要でない	4(23.5)	8(17.0)	8(21.8)
ほとんど重要でない	1(5.9)	0	2(5.4)
まったく重要ではない	0	4(8.5)	3(8.1)
NA	0	1(2.1)	0

表5 読書・映画・テレビを通して死を考える機会となった有無 人(%)

	本学	1年生	2年生
読書 あり	12(70.6)	32(68.1)	27(73.0)
なし	4(23.5)	14(29.8)	10(27.0)
テレビ あり	14(82.4)	39(68.1)	27(75.7)
なし	3(17.6)	8(17.0)	7(18.9)
映画(ビデオ あり	12(70.6)	32(58.1)	24(64.9)
DVD) なし	5(29.4)	13(27.7)	10(27.0)

(8) 死生観に影響を与えた因子

死生観に影響を与えた因子として、「身近な人の死」の割合が最も多いことは共通しているが、本学の学生はT校の学生と比較して「葬儀への参列」「読書」「講義」の割合が高く、「テレビ・映画」の割合が低くなっている。割合としては低い、「実習」に関して介護福祉士としての実習が同じ未経験であっても本学学生とT校1年生とで実習の割合に差が見られている(表4)。

(9) 読書・テレビ・映画

「読書・テレビ・映画(ビデオ・DVD)」(以下マスメディアとする)を通して、死を考える機会となったかどうかについて、表5に示した。両校とも「テレビ」と回答した人が共通して高い割合となっている。

マスメディアを通して死を考える機会となった作品名を表6に示す。

表6 死を考える機会となった作品名

読書	車輪の下(T校) 恋空(T校) がんばれば幸せになれる(本学) ノルウェーの森(T校) 定子の折鶴(T校) 「ありがとう」は折りの言葉(本学) 卒業までは死にません(本学) いのちが危ない(T校) 納棺夫日記(T校) スーホの白い馬(T校)
テレビ	余命1カ月の花嫁(本学、T校) 1リットルの涙(本学、T校) 世界が100人の村だったら(本学) いじめ=14歳のメッセージ(本学) さとうきび畑の唄(本学) 恋空(T校) 夜回り先生(T校)
映画 (ビデオ・DVD)	余命1カ月の花嫁(本学、T校) 世界の中心で愛を叫ぶ(本学・T校) おくりびと(T校) 像の背中(本学) 天国で君に会えたら(本学) 明日の記憶(T校) タイタニック(T校) ロミオとジュリエット(T校) T2(T校) アルマゲドン(T校) シックスセンス(T校)

表4 死生観に影響を与えた因子(複数回答) 人(%)

	本学	1年生	2年生
身近な人の死	13(76.5)	34(72.3)	27(73.0)
葬儀への参列	9(52.9)	17(36.2)	14(37.8)
自分の病気	1(5.9)	4(8.5)	6(16.2)
家族の病気	5(29.4)	17(35.2)	7(18.9)
宗教	1(5.9)	5(10.5)	3(8.1)
読書	5(29.4)	9(19.1)	6(16.2)
テレビ・映画	5(29.4)	20(42.6)	16(43.2)
講義	5(29.4)	6(12.8)	4(10.8)
実習	2(11.8)	1(2.1)	4(10.8)

(10) 死生観

本学とT校1・2年生の死生観尺度の因子得点を表7に示した。両校とも「死後の世界観」「死への恐怖・不安」の得点が高く、次いで「人生における目的意識」「死への関心」となっており、「死からの回避」「解放としての死」「寿命観」の得点は低かった。

(11) 性別による比較

性別と死生観因子合計点による比較をした結果、本学学生男女間に「死からの回避」の項目に有意差が認められた($p < 0.05$)。

男性に比して女性は、「死について考えることを避けた」「死は恐ろしいのであまり考えないように

表7 死生観尺度の因子得点

	本学(SD)	1年生(SD)	2年生(SD)
死後の世界観	19.70(5.24)	20.1(5.75)	19.59(6.90)
死への恐怖・不安	19.29(3.45)	20.12(6.09)	20.10(6.69)
解放としての死	12.00(4.83)	14.36(5.49)	14.29(5.28)
死からの回避	11.64(5.26)	12.80(6.58)	13.62(6.94)
人生の目的意識	16.58(5.24)	15.46(5.07)	16.08(5.88)
死への関心	15.05(5.44)	16.76(5.57)	15.37(6.23)
寿命観	11.11(5.98)	12.61(4.98)	11.91(5.56)

している」などの項目から構成される「死からの回避」の得点が男性より高く、死について考えることを避けたいという傾向がわかった。

T校2年生に、「人生について考えると、今こうして生きている理由がはっきりしている」「人生にはっきりとした使命や目的を見出している」などの項目から構成される「人生における目的意識」に男女間の有意差が認められた ($p < 0.01$)。男性に比して女性は、「人生における目的意識」の得点が有意に高かった (表9～12)。

(12) 死別体験の有無による比較

死生観因子と家族との死別体験の有無では、全体で「死への恐怖・不安」の項目で有意差がみられ ($p < 0.05$)、死別体験がないと回答した学生は死別体験をした人よりも、死ぬことに恐れや不安を持っていることがわかった。T校1年生は、「死への関心」、「人の寿命はあらかじめ決められている」と思うなどの項目からなる「寿命観」に有意差が認められた (表9～12)。

友人との死別体験の有無では、全体で「解放としての死」の項目で有意差が見られ ($p < 0.05$)、友人との死別体験のない学生は、死別体験のある人よりも死はこの世の苦しみからの解放ととらえる傾向がある (表9～12)。

臨終の立ち会いの有無では、T校1年生は、「死後の世界観」「死への恐怖・不安」「寿命観」の項目で有意差 ($p < 0.05$) があった。臨終の立ち会い体験があると回答した人は、「死後の世界観」や人の寿命

表8 自己の死を意識する病気や事故の体験の有無 人(%)

病気や事故の体験	本学	1年生	2年生
あり	4(23.5)	6(12.8)	7(19.4)
なし	13(76.5)	41(87.2)	26(80.6)

はあらかじめ決められていると思う「寿命観」が臨終の立ち会い経験のない人より高かった。一方、立ち会い経験がないと回答した人は、立ち会い経験があるとした人より死への恐れ「死への恐怖・不安」の得点が低い (表9～12)。

(13) 死を意識した病気や事故の体験による比較

自らの死を意識した病気や事故の体験の有無は表8に示した。本学では、「死への関心」に有意差 ($p < 0.05$) があった。自らの死を意識した病気や事故の体験を持つ人は、ない人に比べ「死への関心」の得点が高かった。T校1年生では、「死後の世界観」「人生の目的意識」に有意差 ($p < 0.05$) があった。自らの死を意識した病気や事故の体験のある人は、ない人に比べ「死後の世界観」「人生の目的意識」の得点が高かった。T校2年生には有意差はなかった。

(14) 子ども時代の死の話題の有無による比較

子ども時代の死の話題の有無による死生観因子合計点の差は、本学では「死への関心」の項目で有意差がみられた ($p < 0.05$)。子ども時代からおおびらに死について語られていた人は「死の関心」の因子得点が語られていない人に比して高く、死についての関心が高いことがわかった。

6. 考 察

(1) 介護福祉学生の死を考える機会

対象者の81.2%は、身近な家族の死を体験しており、死生観に影響を与える因子としても「身近な人の死」が70%を超える割合を示していることから、死別体験を通して「死」を意識し、考える機会になっていると考えられる。しかし、調査結果から、学

生の多くはこれまで「死」を身近な自分のこととして意識してこなかったと考えられる。

その理由として、死別体験の割合に対して臨終に立ち会った経験は32.7%であり死別は体験しても、死に逝く人に出会う機会は少なかったものと思われる。二つ目には、自己の死を意識するような体験をした人は、全体の16.8%であった。幸いにも死を意識するような事故に遭遇しておらず、年齢的にも健康問題を意識することが少ないものと考えられる。三つ目は、子ども時代における家庭での死の話題で「語り合った記憶がない」の割合が高かったことから、のけ者にしたわけではないが、子どもに話すことではないという意識の中で「死」の話題から遠ざけられていた状況にあったと考えられる。このことは、戦前より死を「忌」むものとして遠ざけてきた日本人の死に対するイメージも影響していると思われる^{注6)}。

一方では、「読書・テレビ・映画」を通して、死を考える機会となった学生が60～80%いる。死生観に与えた因子として、T校の学生は、「身近な人の死」に次いで「テレビ・映画」など高い割合を示している。死を考えるきっかけとなったマスメディアの問いに対しても、70%以上の学生があると回答している。しかし、前述したように実際に臨終に立ち会った学生の割合は全体から見ても少数である。このことから、死は身近なものでなく非日常の中で考える機会になっていると考えられる。具体的に挙げている作品等の多くはメディアで取り上げられた話題の作品が多く、実話に基づいた作品もあるが、メディア用に作り上げられたものである。一色らによると「今の若者はマスメディアを通じてつくられたドラマ化された死の体験を自然の死と同一視している傾向がある」¹⁾と述べている。

メディア視聴の有効性は先行研究によっても述べられているが^{注7) 注8)}、メディアが与える影響を効果的に活用しながら学生に、まず現実の「死」について考える機会を確保することが必要であると考えられる。

(2) 養成校における比較

1) 子ども時代における家庭での死の話題

本学の学生は、「大っぴらに語られた」の割合が35.3%と、T校1年生の12.8%に比べて高くなっている。しかし、同じ本学の学生であっても、紀要第59号の対象者では「大っぴらに語られた」の割合が27.3%で「不快感があった・のけ者にされた・語りあった記憶がない」で65%近くあった。このことから、養成校・教育課程による相違というよりは、個々の学生の環境の相違によるものであり、一人ひとりの死に対する受け止め方を把握する必要があると考える。

2) 死生観に影響を与えた因子

本学の学生は、介護実習が未経験であり、「終末期の介護」は後期開講のため未履修であるにもかかわらず、死生観に与えた因子で「講義」が29.4%とT校1年生12.8%、2年生10.5%と比べて高くなっている。「実習」についても本学学生は2人ではあるが、因子として回答している。調査対象の母体数が異なるため単純には比較できないが、保育士養成課程で学んだことが影響を与えているのかを今後検証して、教育に反映させていく必要があると考える。

「死生観に対する宗教の役割」について全体で68.6%の学生が重要と考えているが、一方では「死生観に与えた因子」で宗教を回答した人は少なく、重要と回答した人が因子としてあげているものでもなかった。この違いから、学生の日常において宗教が身近なものでなく、具体的に捉えていないため回答にブレが生じたのではないかと考える。

前回の本学学生に行った調査結果^{注9)}では、「さほど重要でない」「まったく重要でない」と回答した人が60%を超えていたのと反対の結果となっている。調査対象者数が限られていることが影響していると思われるが、今後も調査していく必要がある。

(3) 死生観因子との比較

1) 性別による比較

平井らの死生観尺度を用いた死生観因子の性差に

ついて先行研究は見当たらなかったが、朝野ら¹⁰⁾や和田¹¹⁾は死の不安に性差があることを報告している。本学学生の女性に、「死からの回避」が男子学生より高い得点を示した。「死からの回避」は、死に対する恐れや不安から死について考えたくないという否定的な感情だが、学生としては素直な感情なのかもしれない。しかし、今後、介護福祉士として高齢者等と関わる時、介護の延長線上の死として死は訪れてくる。死を真正面から見据え、利用者の尊厳を支える介護福祉士として、死を回避することなく利用者に関わっていくことが重要なこととなる。

先行研究で和田¹²⁾は不安の表出をジェンダーの問題として考察していた。女性は幼少時より「怖い」「避けたい」など不安を表明する機会があり、自らの不安を言葉にすることも比較的しやすい風潮がある。しかし、男性はそのような表現を制限されて育ち、否定的表現を述べられず、深層の中にしまっていることもある。性差や学生個々の背景も念頭に、女子学生だけでなく、男子学生にも心情を表出できるような授業方法を検討していく必要がある。

2) 死別体験の有無による比較

先行研究で渡辺らは、「看取り体験をした学生は死に対する不安をもっている」²⁾との報告があったが、本研究では逆に家族の死別体験をしたことがない学生が死ぬことに恐れや不安を持っているとの結果が出た。また、臨終の立ち会い経験がない学生も死への恐れや不安を持っていることがわかった。

小谷の40歳から60歳の人を対象とした調査では、「家族の死に遭遇した経験のない人の79.7%は死ぬのが恐いと回答しているのに対し、家族を亡くした10年未満では死が恐くないとする人が3割以上を占めた」³⁾と報告している。このことから、家族との死別体験をした学生は、死を身近なものとしてとらえていくが、体験のない学生は、死は未知なるものであり、そのことが死への不安や恐れへとつながっていくと考えられる。

また、小谷は、「家族を亡くした経験だけでなく、家族をいつ亡くしたかによっても、自分の死に対す

る不安感に変化がある」⁴⁾と述べている。家族を亡くした時期の違いが死に対する不安の結果の違いとして表れていると考える。

友人との死別は26%の学生が体験していた。体験したことのない学生は死を「この世の苦しみからの解放」と捉える傾向があるが、体験したことのある学生は友人の死をそう捉えてはいない。友人の死を体験したことで、自分の生を肯定的にとらえる態度となったと考えられる。

家族の死別体験の有無は死生観因子に大きく影響すると考えたが、大きな有意差はなかった。豊田らは看護学生に対する調査の中で、「入学までに死を考えるきっかけとなった事柄は、身近な人との死別体験であったが、入学後、死についての考え方やイメージに影響があったかどうかは、死別体験の有無に左右されない」⁵⁾と述べている。

死別体験した学生は家族や友人と死別し、心理的につらい時期があったことは容易に想像できる。学生は今までの間のつらい思いなどを個々に昇華していると思われる。学生自身のこの体験を自ら内省していけるような指導が必要となる。

少数ではあるが、自らの死を意識するような体験をした学生もいる。その出来事をきっかけに、死について関心を持ったり、人生について考えたりと死生観を熟成する機会となったと考える。多様な年齢や人々と関わる介護福祉士は他者のさまざまな死生観を認め、自らも死生観を育てていくことが重要である。人生経験や死別体験の少ない多くの学生においては他者の気持ちを追体験するよう授業を工夫していくが必要になる。

ま と め

今回の研究では、8割以上の学生が家族の死の体験をしているが、臨終に立ち会う体験をした学生は3割と少なかった。また、死への恐怖や不安については、死別体験のない学生のほうが、その不安が高かった。

死生観には、身近な人との死別体験や死を意識し

た病気や事故の体験、子ども時代の死の話題などが影響することが考えられたが、これらは学生一人ひとりの個別体験である。このことから「終末期の介護」を受講する学生の死生観は、個別体験の違いにより学年・学生による差が生じてくると思われる。このことから「終末期の介護」を教授するにあたっては、対象となる学年の学生の死生観を把握した一定の内容の教授と個別の学生に応じたフォローが必要となると考える。「死」を「忌・恐れ・回避」ではなく、生あるものが遅かれ早かれ体験するものとして、終末期を迎える人が心安らぎ、癒される関わりができるよう介護福祉学生一人ひとりの死生観を育む機会としていくことが求められる。

介護福祉士は、死に逝く人が「その人らしい人生」を安らかに終えることができるよう支える役割を担う立場である。死に逝く人の身体的苦痛・精神的苦痛を和らげる関わりができる為には、介護福祉士本人の豊かな人間観と死生観が重要である。介護福祉士養成の中で、豊かな人間観と死生観を育むには、他の科目と関連させた「終末期の介護」の授業展開を考えていくことが重要となる。また、介護福祉士は「死に逝く」までの人生に関わることから、特に高校卒業後の介護福祉学生に対しては、「人間性」を育む視点が養成教育全般に必要であると考ええる。

謝 辞

本研究に協力していただいた鳥取社会福祉専門学校と鳥取短期大学専攻科福祉専攻の学生の皆さんに感謝します。

注

- 1) 久山かおる「介護福祉学生（1年課程）の死生観調査分析」, 鳥取短期大学紀要第59号, 2009, pp. 37-44
- 2) 厚生労働省「厚生労働白書～平成19年度版」, ぎょうせい編
- 3) AERA Mook「死生学がわかる」, 朝日新聞社, 2005,

pp. 10-23

- 4) 日本介護福祉士養成施設協会「介護福祉士養成新カリキュラム～教育方法の手引き」, 2009
- 5) 平井啓, 坂口幸弘, 安部幸志, 森川優子, 柏木哲夫「死生観に関する研究—死生観尺度の厚生と信頼性妥当性の検証—」, 死の臨床23, 2000
- 6) AERA Mook「死生学がわかる」, 朝日新聞社, 2005, pp. 4-8
- 7) 河村壮一郎「青年期の死に対する態度へのメディア作品視聴の教育的影響」, 鳥取短期大学研究紀要第54号, 2006, pp. 1-7
- 8) 久山かおる, 井手添陽子, 米原あき「ターミナルケア教育におけるビデオ教材導入の効果～死生観尺度を用いた死生観育成の効果分析」, 第16回介護福祉教育学会要旨集2009, pp. 120-121
- 9) 前掲書注1)
- 10) 朝野聡他「死の不安と告知に関する一考察」, 保健の科学, Vol130, pp. 265-269
- 11) 和田晴美「介護学生の死観および死の不安に影響を与える要因の分析」 佐野短期大学研究紀要 2006, pp. 103-116
- 12) 前掲書注11)

引用文献

- 1) 一色康子, 河野政子「看護学生と他分野学生の死のイメージに関する調査研究～調査項目の所属間の比較による検討～」, 看護学総合研究, 2(1) pp. 57-61
- 2) 渡辺きよみ, 野村和子「介護学生の死生観に影響を及ぼす要因の検討」, 大阪体育大学短期部大学紀要, 2006, pp. 73-81
- 3) 小谷みどり「死のイメージと死生観」 LDレポート, ライフデザイン研究本部2003, http://group.dai-ichi-life.co.jp/dlri/report_0923
- 4) 前掲書3)
- 5) 豊田妙子, 斎藤好子「看護学生の死に対する認識変化の要因」, 三重看護学誌2003, pp. 89-96